
たった、ひとつ

雪野おと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たつた、ひとつこと

【Zコード】

Z5908Y

【作者名】

雪野おと

【あらすじ】

幸せを見つけられず、夢を諦めて過ごしていた19歳の少女が、事故で異世界ヘトリップ。必要とされた世界で、自らの幸せを探します。王道、糖度高め、魔法あり戦いありの恋愛ファンタジー。R15、戦闘描写有の為苦手な方は注意。

以前連載していたものを編集中です。

せつめつ（龍書モ）

以前連載していた「たつた、ひとつ」とをキャラクター視点で連載開始する事にしました。詳細は「たつた、ひとつ（田）・お知らせ」にて。

以前の小説を読んでおらず、これから読み始める方は（田）小説はネタバレになつますので、注意下さい。

夢は、毎日笑顔が生まれるよつた、暖かい家庭を持つこと。時には喧嘩してもいいから、理むのは普通である幸せ。

そんな事を考えていたのは、いつの日だつたか。

諦めたの。

……幸せになる事を。

どんなに願つていても、私は……

え……？　うう、は……

「ねえ、おかあちゃん……」

「うるさい！」

あ……小さい頃の私と、……お母さん？

お母さん……どうしてそんな顔をするの？

暗くて、怖い闇を見つめるような

「私はねえ、あんたより舞の方が好きなのよー。嘘。やめて、やめてやめてやめて！」

「おかあちゃん……」

『帰りたい』…………『は、キッチン

ここは、私の家だ。
なのに、私は
帰りたい、なんて。

どこ、に……？ 誰か……私はここにいるの、ねえお願い。誰か
私を

「……ん」

ジリジリヒ、頭に響く田舎ましの音を止めようと手を伸ばして、
軽く叩く。

……嫌な、夢見た。いつもの、夢。実家にいた頃のあの……

仕事、行かなきや。

ああ、疲れた……今日も駄目だ。熱っぽい。

帰りたい……

「行つて来ます」

誰もいない家。返事は返つてこないけれど。

かえりたい……

朝から皮膚が痛む程照りつける日光の下を、黒い日傘をさしながらアルバイト先に向かつて歩く。

残暑が厳しい、九月。じりじりと焼けるアスファルトに、黒い影が揺れる。

今時少し珍しいであろう、私の真っ黒な長い髪が、時折吹く風になびいて肌に張り付く。

私の名前は……蒼井涙、今年で十九歳。

ちらりと田を横に向けると、日傘を片手に斜めがけの鞄を肩にかけた、黒いロングスカートのワンピースの私が、可愛らしい白いレースのワンピースが飾られた店のショーウィンドウに映っていた。自分で見ても健康的には見えないショーウィンドウに映った私は、どこかふらふらとしていて……。

(朝ごはん、食べれなかつた。薬飲まないといけないのに)
朝見た夢のせいでのむかむかを抑えそんな事を考えながら傘を顔に日が当たらないように傾けて歩いていた私は、気づかなかつた。

(一応薬は持つてきたけど……食べないで飲むと、吐いちゃうんだよな)

田の前の信号が、赤く、光っているのに。

一步、また一步踏み出す。

キキイ———！

「つあーー？」

周囲に耳を塞ぎたくなる、暑い中に寒氣のする音が響いた。

そう、その音だけが、私の耳に届いた。

ふわふわ

身体が、浮いている……？

「…………うわあ、綺麗」「田をゆっくり開けると、身体は……やつ、例えるならば真っ白な雪の中。

…………懐かしい。

冷たいのか、そしてどこにいるのかなんてわからない。いや、足がどこか地面についているのかもわからない。足を動かしてみる。…………びいかにつけた様子はない。

不思議と恐怖や焦りを感じることなく、その感覚を楽しんだ。空から、ふわりふわりと雪が舞い降りてくる。

なんて、綺麗。

ああ、私、しんじやつたのかな…………

たぶん車にはねられた、よね。でも痛くなかった。うん、よかつた痛くなくて。

最期に、雪も見れだし。

あんなに生きたかった筈なのに、どうしたんだうつわたしあんなに、頑張ったのに……

私

ひとりぼっちの、ままだつた……な。

何も感覚がなかつたはずなのに、冷やりと冷たい風を感じる。急に意識がはつきりしてきて、私はゆっくりと目を開けた。

……どうだらう、すうこ口差しが暑かつたはずなのに

視界がぼやぼやしてよく見えないけれど暗くて風が冷たくて、私はぼんやりとしながら体を起こそうと力を入れたと同時に、顔を顰めた。

ちくちくと肌がむき出しの腕や足に何かが刺さる。そしてそれよりも、体中が酷く痛い……やっぱり、車に轢かれたんだ、私は。じやあ……さつきの白い世界は、夢？

仕方なく何が起きたのだらうと、痛む身体を押さえながら何とかゆっくりと上半身を起こす。

やつとの事身体を起こした、たつたそれだけではあはあと息が乱れ、呼吸を整えようとした私は……そのまま、はつと息を飲み込んだ。

私の目の前に広がる景色。それは、どう考へても自分が車に轢かれた場所でもなれば、病院でもない。暗く、湿つた空氣、冷たい風が吹き付けるそこは、鬱蒼とした森の中で。

真つ直ぐに伸びた木々が辺り一帯に生い茂り、空を覆う葉は暗いせいでの青々とした色は見せず、昼間ならば美しい森なのかもしれないが今は私の不安を煽るだけ。

あわてて起きようとして、すぐに痛みで私は小さく声をあげた。相当痛い。おかしいな、どこか怪我してるのかな、と腕や足に視線を移すが、よくわからず溜息をついた。

三途の川……じゃなさそうだしなあ。花もなければ、肝心の川もないし。さつきからちくちくするのは、枯れた葉っぱみたいだし…

…だめだ。とにかく、私は生きてるみたい。こんなところでもんやりしているのはまずそつ。

どこの人のいるところを探さなくちゃ。

むづくつと立ち上がり、近くの木に手を当てて身体を支える。その時、がさりと草の葉を搔き分ける音がした。

「ひつ！？ うあ、く、あ……！？」

目の前に立ち塞がる黒い何か。それは、まるで漫画やゲームで見そうな、熊のような何かが、ぐるる、と唸り声をあげているところで。

痛みなんて感じなくなってしまったほど、私の身体は危険を察知して急速に冷たくなるのがわかった。

これは、やられる……！

「見つけた！ 何をしているんです、逃げますよ！」

今度こそ死を覚悟したとき、私は突然聞こえた声とともに強く腕を後ろに引かれ、その瞬間目の前が青白く、バチンと音を立てて光った。

見知らぬ土地 2（前書き）

わざわざお気に入り登録してくださった皆様ありがとうございました！

「いじります！」

「痛つあ、待つてつ、くださ……つ」

頭に響く男の声。強く腕を引かれた私は、思い出したように痛んだ身体のせいでの悲鳴をあげた。

「え？ どこか怪我をされているんですか！？」

私の腕を引いた男の人は慌ててその腕を離し、すぐ私を支えるよう背に手を回して……じつと私を見た。痛みに歪む視界の端でその声の主を見た私は、少し驚きに目を見開く。

さらりと長すぎず短すぎない美しい金の髪に、整った顔立ち、そして薄い唇から紡がれ低すぎず高すぎず、透き通るような思わず聞き惚れてしまう声。

何より、切れ長の目から覗く瞳は引き込まれてしまつような海を思わせる深い青で、息を飲んだ。

が、外人さん？ 顔は、そんなに日本人離れしてない気がするけど……いや待つて、日本語日本語！

「服の上だとわかりませんね。すみません、強く引いてしまって。走れですか？」

「えつと、あ、その……」

とりあえずするりと足を引きずつて、背を支えてくれている綺麗な男性から顔を逸らし、先ほどの熊とは反対の方に移動しようとしたら私は、がっくりと膝をついた。

「つあ！」

「駄目そうですね。すみません、戦います。隠れていてください」

「え、あ、た、戦う？」

自分でも驚く程すとんと地面に落とすように膝をついた私は少し涙目になりながら質問したが、彼は答えず私の身体をゆっくりと支えたまま自分の後ろに下がらせた。

「少し驚くかもしねませんが、必ず護りますから
は……い？」

半ば呆然とし、頷くや否や私は傍にあつた割と大きめの木の傍に移動させて、一瞬だけ穏やかな、とても安心できる笑みが向けられたがその男の人はその場から離れてしまつ。

ペタリと座り込んでしまい枯れた葉が手の平にちくちくと刺さつて痛んだが、そんな事もすぐに忘れて……私はこの事態がいかに非常事態だつたかを思い出した。

「そう、熊さん……っ

「や、待つて、そつちは大きな熊さんがつ」

「落ち着いて下さい。隠れていって！」

緊迫した声に、痛む身体を押さえつつ慌てて木に身を隠す。

唸り声を上げるものはよく見ると全体の雰囲気は熊の様に大きく手に爪が覗くものの、頭は狼のようで口からは鋭い牙が覗き、長い尻尾が見える。尻尾がダンダンと地面を叩いて木の葉が舞つた。

え、違う……熊さんじゃない！

「なに、これ」

つい口から出てしまう言葉。ありえない。あんな生き物知らない。そう呟きながら首をふるふると横に振つてみると、視界からそれが消える事はない、自然に零れた涙が頬を伝う。

先ほどの男の人は、なにやら腰から外すと、手を大きく振つた。

「あなたの相手は、私です」

待つて、戦う？　まさか戦うつて、この熊さん……じゃなかつた、えと、狼さん？　と？

「や、あ、危ないです！」

狼さんらしきものが悲鳴を上げた私に向かつてこよつとしたところを、あの男性がどこからか取り出した剣を突き出し止めた。

剣は青いような、紫のような光を放つていて、パチパチと音がする。……剣！？

……雷みたいに見えるのだけど、そんなまさか！

目を見開いて少しだけ身を乗り出してしまったその時、狼が手を振り上げる。青年に鋭い爪が向かい、思わず頭を抱えて私はやめて、と叫んでしまう。あんなものに当たつたら、人なんて、そんな恐怖が頭を支配して。

しかし果然とそれを見ていた私の目の前で彼はその光を放つ剣をあつという間に狼に突き刺し、刺された巨体は強く光つたかと思うと……大きないくつもの肉片となつてばらばらとその場に崩れ落ちた。

「……っ！」

あまりの光景に絶句し、ひどい吐き気が私の身体を襲う。倒した。そう、彼のおかげで危機は消えたのだ。それでも、目の前の惨状に頭がぐらぐらと揺れるようだ。

そんな、そういうば藥、飲んでなかつた。

必死に耐えて口元を手で覆つていると、背に暖かいものが触れた。

手だ。

さつきの彼が心配そうに顔を覗き込んでいて、その大きな手は安心させるように私の背をゆっくりと撫でている。

「……『』、めんなさ」

「謝る事はありません。目の前で戦闘をしてしまい申し訳ありませんでした。立てそですか？」

「……から離れたい。そう思い頷くにも、胃の不快感と恐怖からぼろぼろと涙が零れ落ちて地面の葉を濡らしていくだけで、私はそのまま少しの間、黙つてその場で下を向き続けた。

「すみません。先程の戦闘で、驚いてますよね？　とりあえず、この先に私が使つてる小屋がありますから、一旦そこに行つて話をしましょう。休ませてあげたいところですが、ここは危険です。先程の戦闘でまたあれらが寄つてくるかもしません」
しばらく私の背を撫でていた彼は、そうこうして私に手を差し伸べてきた。

「……はい」

ゆっくつと手を貸してもらひ立ち上がり、状況を把握しようと深呼吸し顔を上げる。

やはり景色は変わらない。鬱蒼とした薄暗い森の中。数歩先には先程の怪物の肉片。そして、自分の身体を襲う痛みは本物。これは、夢ではないのだと一度目を閉じ首を振る。

「一体先程のあれは何なの。ここはビーナの。またあれらが寄つてくるかもしれないって、ここは一体……」

支えられたままゆっくりと歩き、私は聞きたい事だらけで混乱する頭を必死に落ち着かせながら唇を噛み締めた。

「……それでも、よく見ると彼は変わった服装をしている、と、そつと前を歩く彼を見る。

黒のパンツに濃い青色の何やらバッヂのついたジャケットを羽織つていて、それはまだ普通の範囲……、と何とか自分を納得させたけれど、腰のベルトには私にはよくわからない形の綺麗な石や杖に見える物等がついていて、腕や、上着に隠れているが足にも同じようатегルト。小さな短剣もある。微妙に、生地も私にとつて馴染みある物とは少し違つように見えた。

そういえばやつきの剣はどこにいったんだろう。そこまで考えてふと顔を上げると、彼も私の様子に何か思うところがあるのか、その視線が私の斜めがけの鞄をじっと見つめている。

「あ、あの」

「ああ、すみません。えっと、鞄に何か護身用の武器は入っていますか？」

「ぶ、武器、ですか？」

何言つてるの、そんなもの、普通持つてないよう……っ！
焦る私が困惑したまま彼を見上げると、一度その表情を見て「あと眩いた彼は少しだけ視線を泳がせて、口元に考え込むように握った手を当てた。

「ない……ですよね」

「いや、えと、あの」

絶対おかしい。そつは思うのに、彼が冗談を言つてこらよつとは見えない私は、返事にならない言葉を繰り返す。

「あ、小屋が見えました。少し待つていてください」

そんな私を苦笑して見つめ、彼は確かに見えた小屋の傍まで歩くと、中を確認してほつと息をつく。

「……大丈夫そうですね。中に入つて話しましょう。守護壁を張りますから、安心して下さー」

守護壁って何。そつは思ったのだが、私はとりあえずそのまま扉を押さえている彼にぺこりと頭を下げて、小屋の中へと入る。

少し緊張したまま入つた小屋の中は、棚とテーブルに椅子が一脚、ベッドが一つ。殆ど必要最低限と思われる物しか置かれておらず、極稀に利用する程度といった様子が見て取れた。

彼は扉を閉めるとベルトから外した何かを手の平で握り閉め、ぼそそと何か呟く。途端に冷え切つた小屋の中が少し暖かく感じ、張り詰めていた気が少し軽くなる安心感に包まれた。

「……寒いですか？」

「……少し

未だに少し見て、彼は優しく声をかけてくれる。

ぱつ、と急に小屋内に明かりが灯り、私は漸くはあと深く息を吐いた。

寒くて震えているのか、恐怖で震えているのか……わからない。

「これを」

青年は腕のベルトを外し、ジャケットを脱ぐと私の肩にそっとかけてくれた。暖かいジャケットが、私の震える身体をすっぽりとほぼ足元まで包む。でもこれじゃあ、彼が寒いんじゃないのかな？

「あの、私大丈夫ですから、」

「待つて。私は大丈夫ですから。落ち着いて、ゆっくりお話ししますよ」

彼は安心させるようにか、二つ三つと微笑んだ。

「まず、そうですね……私の名前はカイトと言います。カイト・フォルストレ。フォレストーン騎士団の能力者です。お名前、伺つても？」

目の前の彼……カイトさん、は、穏やかな笑顔で自己紹介してくれる。でも。

「名前……？」でも、ちょっと待つて

「フォル、フォレス……え、外国、じゃないし……やっぱりここ、日本じゃ……」

「二ホン？」

「えっと、私、日本の」

駄目だ。落ち着こう。そう考えて私はそっと息を吐く。説明してもわからないかもしない。先程の狼さんにとって、雷のような剣にしても、それはとても……私の知っていたセカイとは違つて感じたから。

「やはり、異世界の方なのですね」

「……え？」

私は思わず裏返った声で返事ををしてしまった。まさかと思つた矢先に、目の前の人物から異世界だとか言い出すのだから。

「私、この世界の人じゃ、ないの？ 騎士団つて、何？ あなたは、何？」

私は今更ながらどうして黙つてついてきてしまったのだろうと唇をかみ締めた。知らない状況に巻き込まれ、混乱して、ただ一人目の前にいる人間についてきました。……助けてくれたのは、間違いないのだけれど。

「落ち着いて……私はあなたに何かしようとしているわけではありません。騎士団は民を助ける者です。あなたに何もしないと誓いましたから、落ち着いてください」

彼が焦ったように言葉を続ける。見上げた彼の青い瞳は困惑で揺らいでいて……。

「…………すみません……私の名前、るいです。えっと、蒼井、涙です
いが名前」

「ルイさん、ですね」

どうするのがいいのかわからぬものの、今はこの人を信じるしかないと名を告げて顔を上げれば、カイトさんはその整った顔を複雑そうに歪め困ったような表情をしていた。その表情が今の状況を考えて微妙に違和感を感じて、私はその顔をまじまじと見てしまう。

何故、異世界の人間だと知っていたような問いかけをしておいて、そんな表情をするのか。何か戸惑いはあるにしても、どこか……そう、何か知つていて隠したがっているような。

「何か、ご存知なんですか？」

「…………え、そうですね、とりあえず、詳しい事は明日にでも。今日はもう遅い。明日、王都にお連れします」

「えっと……」

いきなり王都と言われても、意味がわからず私は口をぱくぱくとさせた。わからない事だらけ。このまま休むと言われても、確かに疲れきっているけれど正直無理そう。

好きでよく読んでいた本の中にはあつたように、異世界に飛ばされるなんて事がまさか自分の身に起きたのだろうか、と少ない情報の中から考えて、眩暈がした。それに、目の前の何も言つてくれない青年は明らかに何かを知っている。

しばらく黙り込んでいたカイトはさん、急にあつと声をあげると、すみません、と頭を下げた。

「突然こんなところに来られたのに、何も知らないところのは落ち

着きませんね。気がきかずみませんでした。そうですね、この世界の事をお話ししましょうか」

「……すみません、お願ひします」

カイトさんは微笑んだ後ゆっくりと話し始めた。

「まず、ここは王都フォレストーンより少し北にある森です。この世界は、王都フォレストーン、それから各守護神の加護を受けた町が集まっている世界です。王は統べる者、平和の象徴、光の神の加護を受けたもので、光の民。他、4つのその町を守護する神の加護を受けた民と長があり、成り立つ世界です」

ゆっくりと、一言一言を選ぶように彼は言葉を続ける。異世界の住人に説明するのが慣れている、というわけではなさそうな不安げな表情で、一旦区切り私の顔を覗き込んだのは、確認の為だらう。……正直難しくてよくわからないのだけど、私は一度頷いた。

「もし話の途中で疑問があれば、どうぞ遠慮なくおっしゃって下さいね」

「じゃ、じゃあ、他の4つって」

「王都は光の民。他は水の民、風の民、地の民、火の民になります。それぞれその土地の神の加護を受けています。水の民なら、水の神の加護を」

「……カイトさん、は」

「ああ、そうですね。私は、光の民です。先程魔法を使用しましたが、あれは光の民にしか仕えない魔法なんですよ」

そう、彼は先程、何もないところから剣を取り出した。しかも、雷の様に光る剣を。

「民の中には、魔力を高く持つて生まれてくる者もいます。そういう人間はその地の加護を強く受けており、水の民なら水の魔法、風の民であれば風の魔法を使用します。私の場合は光の民ですので、各地の神に加護を受ける事ができればすべての魔法を使用できます」

「……光の民は強いんですか？」

「光は統べる者ですから…ですが、強いとはいえませんね。いくらすべての魔法を使えたとしても、威力が強いかどうかはその使う人間次第ですか？」

「なんか、難しいです」

話の内容が自分の住んでいるところとは違いすぎて、混乱した頭でそう言えば、すみません、とカイトは笑顔のまま申し訳なさそうに眉尻を下げた。

「あ、すみません。えと、説明がわかりにくいんじゃなくて……あまりにも、違いすぎて。私の世界に、魔法なんてないんです。物語では出てきたりするけど、見るのは始めてだし……正直見ても実感が、ないんです。加護とかも……私にはよくわからなくて」

慌てまくし立てるように言葉を続ければ、カイトさんはふつと笑ってその手を私の頭に優しくのせ、落ち着くように、と声をかけてくれる。

随分と大人っぽい人だなと私は顔を上げて、そこで、ああ、私が子供扱いされるのかもしれない、と少し落ち込んだ。自分の見た目もあつていつも少し幼く見られるのは慣れていたのだけれど。

「疲れましたか？ 明日には、王都に」案内します。」
「魔物がいて、危険ですから」

「闇の者、ですか」

もう、これ以上言われてもわからないかもしない。とぼんやりと目の前にいる人物を見上げれば、彼は優しそうに微笑んだまま。「ええ、先程説明した町の民以外に、闇の神の加護を受けた……闇の民も存在します。最も、魔物と呼ばれる存在で人間を攻撃してくるものが多く、拠点はありますが町があるわけではありません。先程の大きな生き物もそうです。王や長達が結界を張る町を一步出ればそこはいつ魔物が現れるかわからない危険な場所になります」

「……怖い、世界ですね」

「すみません。こうなったのも……いえ。そろそろ、休みましょうか」

「えと、最後に一つだけ、いいですか？」

突然顔を上げた私に、カイトさんは一瞬驚いたように目を見開いたが、すぐに穏やかに笑う。何でしょうか、と言われて私は少し戸惑い視線を泳がせたが、一度ぎゅっと目を瞑り、そして真っ直ぐカイトさんを見た。

説明してくれたのは、この国の事、だけ。

「……あなたは私が異世界から来たってすぐに認めてこの世界の事を教えてくれたんですね？ ……つまり、こんな事をすんなり信じる理由あるんですね、知ってるんですね？ 私はそれが一番知りたいです」

ぐ、と前に詰め寄り、私はじつとカイトさんを見る。彼は視線を

泳がせることなく真っ直ぐに私の瞳をしばらへ見つめ、その後一つ息を吐いた。

「……すみません。そうですね。……ですが、申し訳ありません。心当たりはあるのですが、詳しく述べは」

「いいです、教えてください。何もわからないほうですが、その、落ち着かなくて」

「……占い、で。異世界の少女現る、と。探すよひと言われて、私はここにきました。ナビ、まさか本当に異世界から来られた少女に私がこひして呂つりどが出来るとは思わず」

「占い……？」

「ええ、数ヶ月前、ですね。王都の占い師が、そう預言しました。異世界の光の加護を受けた少女現る、と」

「え？ 光の加護、ですか」

「すみませんが、ここでは詳しへば……」

「あ、そつ、ですよね」

つまりどうこう事なのだつて、と考えて首を捻つた。よくわからからってきて、魔法なんなくて。

そんな話をいきなり飲み込めといわれても難しい。

そう考えて俯いて……視界の端に映る輝きに、私はほんとうとした。

「えつー！」

「どうしました？」

カイトさんが、急に髪の毛を引っつかんで驚いた私を覗き込む。私は少しばかり青いであろう顔をあげて、白らの……濃い金色蜂蜜のような色の髪を見つめた。

「金、色……！？」

「……え？ そつですね、綺麗な色だと」

「で、でも私、黒髪の筈で」

「黒？ ですが、あなたは光の加護を受けた者の筈ですから、金で

間違いないと……」

光の加護を受けた者は、ほんどうが金色の髪を持っています、とカイトさんは首を傾げて呆然としている私に教えてくれて。色、変わらんだ……もつ驚く事がありすぎて、あまり驚けなくなつてきた。

「…………私からも一つ、いいですか？」

「え？　あ、はい」

考え込んでいる時に、突然カイトさんから話しかけられた私はびくりとその顔を見上げた。

「その…………怖くは、ありませんか？」

「…………怖いですよ？」

どうして？　今だつて、びっくりして、怖くなつて、あ……

そうか。もしかしたら、普通に考えたらいきなり異世界になんて飛ばされたら……もっと、泣き叫んで、喚いて、……帰して、なんて訴えるものかもしれない。そう、泣くはずなんだ。けれど、もともと私は感情が表情にあまり出ない上に……それをする事ができない。いや、泣くことを思いつくことすらなかつた。痛みで自然に涙が出る事はあつても……辛い、寂しい、そんな涙は……そんな事は、言つなれば『慣れてない』

「…………驚いて、ます。ただ、そうですね。驚きすぎで、どうするのが普通かわらかなくなっちゃいました」

上手く説明ができず、俯いて私は小さく言葉を続けた。カイトさんは少しだけ黙つたあと、ゆっくりと口を開く。

「お疲れでしうから、そちらでお休み下さい。簡易の休息所ですので、寝心地は…………あまりよくはありませんが」

カイトさんが指差すのは、確かに硬そうな小さくベッド。しかし私はそれを見た後きょろきょろと辺りを見回して、あの、とかイトさんを見た。

「ベッド……」

「すみません。初対面の男がいては寝にくいとは思いますが、……とはいっても、私が外に出ては守護壁も張れませんし、申し訳ありませんがこちからで休んで下さいね。私はここで休みます。もちろんあなたが困るような事はしませんから」

少し距離を取り、ここで、とベッドからは大分離れた位置でカイトさんは座り込んだ。私は慌てて、言いたい事はそうではないと手を振った。

「いえ、そうじゃなくて……あの、私はここで休みますからベッドを使ってください」

「……え？ なにを言っているんです。女性を床で休ませるわけには」

「でも、見たところベッド以外に毛布の類もないですし。風邪ひきます」

私はどうしても守つてもらつてこるのでベッドで休むなんて、できなくて……

自分も床で寝たら風邪をひくかもしれないというのは、わかつているのだろうか……カイトはふつと笑い、どうするべきかと部屋を見渡した。確かにベッドに申し訳程度に薄い布があるだけで、他に体を包むような物はない。守護壁を張った事で多少部屋は暖かいが、気温は低い。今部屋を照らすのは小さな火一つで、守護壁を張つている今その火を大きくして気温を上げる事は……俺の体力的に望めなかつた。

ふとそこまで考えたところで目の前の幼い少女の身体がカタカタと震えている事に俺は気がついた。薄明かりでわかりにくいが、指

先も唇も白く、彼女の着ている服はかなりの薄手。小屋に到着した時にジャケットを渡したもの、スカートで足はむき出しだで、おそらくとても寒いのだ。

「……何もしないと誓いますから、一晩我慢できますか？」

「え？」

俺は怖がらせないようゆつくりと立ち上がり、彼女の手を取った。たつた一つしかないそのベッドに向かい布を寄せるとい、彼女の身体に腕を回す。

「手が、これ程冷たくなるまで気づかず、申し訳ありません。この薄い布団では身体は温まりませんね」

「え？ あの」

彼女は抱き込まれ混乱した頭で、おろおろと視線をさ迷わせる。俺は落ち着かせるように手を彼女の頭に伸ばして、髪を梳く様に上下に動かした。大切に、優しく。

「怖がらせて、すみません。絶対に何もしないと誓いますから、一晩だけ信じてください」

「信じる？」

俺は撫でていた手はそのままにもう片方の腕でゆつくりと彼女を引き寄せ、そのままベッドに座らせると、横たえる。自分が抱き込むよつな形で。

「……っか、カイトさん……！」

彼女が引き寄せられた俺の胸に手を添え、慌てたよつに押してみるも、まるで抱き枕の様に俺に抱えこまれた腕の中では動けない。頬を彼女の長い金の髪が擦り、暖かい体温がどこか俺の隙間を埋めてくれているようだ。

「初対面の女性に、とても礼儀の欠いた事をしているといつ事はわかっています。ですが……もう少し魔力が高ければ部屋を温める事もできたのですが、申し訳ありません」

「カイト、さん」

少女がぴたりと動きを止める。

何かを考えながら自分を包み込む腕を押す」とを止めた彼女は、ふ、と一つ息を吐いた。

「……すみま、せん」

静かに俺の腕の中に収まつた少女を、優しくあやす様に頭を撫で続ける。

と、じばりくぼんやりと目を開いていた彼女は疲れのかうづりうつりとその綺麗な瞳を隠し始め、やがて規則的な吐息の音が聞こえてきた。

暖かな彼女を抱きしめてこるひるひる、俺もゆづくつと夢の世界に引き込まれていく。

占いで告げられた彼女の事は、俺だけではない、各地の騎士が探していた。まさか本当に俺が見つける事になるとは思わずにして、長らくいなかつた光の神子が現れるなんて半信半疑で探していたのに、異世界の少女は確かにここにいる。

これから戦いに巻き込まれてしまつ、幼い少女を引き込むのは俺の役目となつた。少しだけ、唇を噛む。

ならばせめて守つて見せよう。この世界の、希望の光を。

何故、泣かないの？

ぽんやりとした意識の中でゆっくりと誰かの声を聞いた。

それは、自分がきっとおかしいからだ、と答えた。

慣れているから。自分は、幸せを諦めてしまったから。何が起きたも、未来を危惧してしまったから。

母と、仲が悪かった。母が好きで、好きで。ずっと母の為にと努力したつもりだったのだが、結局妹の舞と「同じ」にすらなる事はなかつた。

これ以上居場所のないそこにいるのが嫌で、家を飛び出して。フリーターで生活を繋いで、将来はいつか、友人から聞くような暖かい家庭を持つことを夢に見て、夢を持ち、何とか生活していた私を襲つたのは病魔だつた。原因不明の病は、僅かだが熱が下がらないという微妙な症状を続け私の身体から体力を奪い、生活力をゆっくりと奪つていく。厳しい母に友をも否定され、たつた一人で生きてきた私はその中でどうどう、将来幸せな家庭を持つという最大の夢すら諦め始めてしまつた。

諦め。それはいけない事だと頭ではわかっているのだが、身体がどうしてもついていかず心も納得はしなかつた。その状況で必死に、なんとか一人でも暮らせるようにという事だけ考えて生きていた私は、何が起きても、もういいや。と思っていたのかもしれない。

夢を抱いていた時は、あんなにも未来に期待して、生きたいと強く願い続けていた筈なのに。

明るい……。

「うつすらと視界に光が入り込み、私はゆっくりと瞼を押し上げた。揺らぐ視界に入り込む光に、今日はバイトの日だつたか、と考えた私は……自分を包み込む温もりに気がついてびっくりと身体を奮わせた。

「……起きました？」

「……、あの、えっと……おはよひじります……」

「おはよひじります。そんなに怖がらないで」

「そうだ。私、変なところにきちゃつたんだつけ。しかも見ず知らずの男の人の腕の中で寝ちゃうし、うわああつ、何かいろいろダメでしょ自分！」

カイトさんは慌てる私を見ながらふつと笑つてゆっくりと身体を起こす。離れた温もりに身震いし、身体を縮めれば、同じ体勢で固まつて眠っていたせいか酷く体が痛んだので、仕方なくゆっくりと身体を起こした。

絶対ありえない。初対面の男の人と寝るなんて。私、さいあくだけ……。

昨日は酷く疲れて眠かつた気がする。そのせいだろうか。でも、神経図太すぎる。そんな事を考えていたせいかこころと表情を変える私を見て、カイトさんは少しだけ安心したように微笑んだ。

「……大丈夫、ですか？」

「え？」

カイトさんの手がゆっくりと伸び、私の頬に指先が触れる。

「昨日はすみませんでした。……怖くないはずは、ないのに」

「え？……まさか私、寝言で何か言つてました？」

「……いえ、特には。食事、できそうですか？」

「え、えつと、はい。あ、できれば、お水いただけますか？ 薬飲まないと……ああ、昨日、飲んでいないや」

カイトさんは立ち上がり荷物を置いている一角に移動しながら、

少し心配そうに振り返る。

「どこか、体調が優れないのですか？」

「あ、その、持病で。微熱が、下がらなくて。そのせいでいろいろ……昨日もそのせいで随分寒かったんだと思います。すみません、迷惑かけて」

「……いえ」

カイトさんは少し何かを後悔するような表情をして立ち止まつた後、不安そうに顔をあげた。

「薬は、熱を下げるものですか？」

「いえ、熱は微熱で、たいした事なくて薬使えないんです。飲むのはその……吐き気止めといいますか」

「すみません。辛そうですね。実は、ここには簡単なものしかなくて。食べれそうですか？」

そういうてカイトさんは荷物からパンを取り出し、私に見せた。それは確かに柔らかそうには見えず、口持ちするジャム瓶が一つあるだけだ。

「大丈夫です。すみません」

食べ物に何か言つつもりはない。いきなりこの世界にきた私にとって、守ってくれる人がいて食べ物があるなんて、幸福な事だ。

「いえ。食べたら、出発しようと思うんですが」

「はい。お願ひします」

私はパンを受け取りながら、自分の体力で大丈夫だろうか、とベッドの脇にある小さな窓の外を見つめた。天気はおそらく、悪くはない。

「ここから四時間程歩かなければならぬ」と思ひます。休憩を挟みながら行きましょう」

「……すみま、せん」

自分は明らかに足手まといになるだろうと考へて、私は俯いた。でも、ここで彼においていかれては私はどうする事もできない。そ

ここまで考えて、どうして彼はここまで自分に優しくしてくれるのだろうか、と首を傾げた。いくら『占い』とやらで彼が異世界から的人物を探していたとしても、彼の行動にはとにかく……優しさが感じられる。優しくされるのに、慣れていた。

「いえ、気にしないで下さい。一晩あなたで暖をとらせてもらいましたので、お礼にとでも」

カイトさんはそういうて、にっこりと……少しだずらつ子のように笑つた。少し楽しそうな声に、私の顔はおそらくすぐに真っ赤になつただろう。

「わ、私……っ」

「すみません、意地悪が過ぎました」

くすくすと楽しそうに笑うカイトさんの手が私の頭を撫で、子供っぽかつただろうかと私は俯いて少し唇を尖らせた。そんな姿が、子供っぽいとは本人は気づかないが。

ぱさぱさとしたパンをジャムはつけずに食べ終え、水を貰い薬を飲んだ私は何やら荷物を漁つていたカイトさんに、布を手渡される。広げてみるとそれは服で、厚めの布で出来ているズボンと、首まで覆う襟に長袖の上着は、どう見ても男物だ。大きい帽子も一つ渡される。

「服が、それしかなくて。今の服ですと、田は昇りましたが寒いですね。それと……もしかしたら田立つかもしれませんので。男物ですが、そちらの方が王都に入った時も田立たないと聞いています」

申し訳なさそうにカイトさんがそう言つて、出ていますね、と小

屋の扉を開けて外に出た。

どうしようか、と考えて、今の自分の服はきっとこの世界では田立つ格好なのだろうと思い至つた私は、それは嫌だとすぐに着替え始める。だって目立つのは好きじゃないし……。

しかし、身長も低く女の私の身体は服の中で泳ぎ、姿見の鏡はな

いがおそらくずいぶんと変な格好をしているだらう。

なんとかズボンはベルトで絞り上げ、大きな上着はどうじょうもないのでもそのままにして諦めて、慣れない金の長い髪を高いうちで結い上げ帽子で隠す。どうせなら、格好だけでもぱつと見男のほうがマシだ。最後に来ていた服を丁寧に畳み鞄に入れると扉をゆっくり開けた。外で待っていたカイトさんが、少し驚いたように手を見開く。

「すみません、そこまでサイズが合わないとは思いませんでした」

「えと、あの、『めんなさい』」

これじゃ元の服装より田立つんじゃないかな。居た堪れなくなつて俯けば、上から少しだけ笑い声。

「王都についたら、服を揃えましょうね」

「……あ、の。私、お金……これ、使えませんよね？」

鞄から取り出した財布の中のお札を一枚取り出すが、カイトさんは首を傾げる。

取り出したのは、一万円札。元の世界であればこれである程度できたのかもしれないのだが……。

「それが……あなたの世界のお金、ですか

「やつぱり使えないんですね」

どうしよう、と頑垂れた。これでは、王都につくのもどうしようもない。そもそもこれからどうなるんだろう。

「まあ、いろいろな事を含めて話しえてましょ。安心してそれを」
護りますから

「……、何で、ですか？」

「……？　いけませんか？」

しばらく思案するように顎に手を当てていたカイトさんは、ふといきなり少し困ったように笑い、下心はありませんよ、と言つた。
「そ、そんなつもりじゃ

カイトさんはまだくすくすと笑つている。悪い事を言つたと少し

俯けば、ふわりと頭にのるのは彼の手。

「気になさらないで下さい。いきなり何もわからないあなたを放つておいたりはしませんし、好きでやっている事です。……子供は甘えていいんですよ」

「……」「子供？」

「ああ、そういうえば……私は23歳なのですが、あなたはおいくつですか。13、4くらいでしょうか」

「……19、なんですか？」

「……ええっ？」

しばらく目を見開いて呆然と私を見ていたカイトさんは、我に返るとすぐに頭を抱えた。小さな声で、「すみません」と聞こえる。

「……大変失礼な事をしてしまいましたね、昨日も含めて」「わ、若く見られるのは、慣れます……」

何か、昨日からの態度に妙に納得がいった気がする……

私はそう思いながら「昨日」という単語についてふと考へ、昨晩の事だと思い至り顔を真っ赤にした私の頭上で、もう一度「すみません」と声が聞こえた。

カイトさんはどうするべきかとしばらく様子を見ていたが、行きましようか、と氣を取り直したように微笑み、私は一度だけ小屋を振り返りすぐ歩き出した彼の後を追いかけた。

カイトさんは宣言通り、私の様子を見ながら休憩を挟み、ゆっくりと進んでくれた。途中昨日の狼さん……じゃなかつた、魔物？程ではないものの、ちょくちょく現れる蝙蝠のような魔物はすぐに魔法でカイトさんが倒してくれている。それも、恐らく私に配慮した戦い方で。

本で見るより実際に目にする魔法のすゝさに私は目を丸くするが、それよりも驚くのはカイトさんのどこか慣れている様子の戦い方。ぱつと手を振り切った場所に雷を出現させ、敵を一瞬で切り裂いて……それが、昨日のように血肉が飛び散る事なく、まるで、そう……水が蒸発して水蒸気になるように、断面からぱつと白い光の粒が飛び散つていき、きらきらと輝いて空気に溶け込み消えていく。おかげで昨日程の恐怖は感じずに私は道を進んでいた。

……もっとも、恐怖、混乱は今は殆どなかつた。なぜかつてわかつてゐる。私は……我慢、うつうん違う。諦めるのは……慣れてるから。特に元の世界に興味も執着もない私は焦る事も恐怖する事もない。ただ今私を守つてくれていてる彼は『私を守る』といつ点において嘘は言つてないようだし、嘘をついていたからといって特に私は困らない。今は流れに身を任せるとか、どうでもいいのかもしれない。あるのは、若干の興味……彼は言わなかつたけれど、占いで予知された私を探す『理由』だ。

「なるべく魔物に見つかれないようこと術を施してはいるのですが、何回か戦闘になるかもしません」

「……大丈夫です、すみません」

確実に足手纏いだと自覚している私は、ただただ申し訳なくて俯く。護身用の武器になりそうなものすらない。ここではカイトさんに護られるしかなかつた。

「ありがとう、の方が嬉しいです」

「え？」

「昨日から、すみませんばかり聞いていますから」

「言われて、そうかもしない、と気づいて。

「……それは、たぶんカイトさんもだと思います」

「そうでしたか？」

顔を上げると、カイトさんはにこりと微笑んでいて。
綺麗な顔だなあ。背、高いし。もてそう。……って私、何考えて
るの！

そんな事考える余裕が出てきた事に、私は一人苦笑する。でもし
ょうがないよ、本当にびっくりするくらい、綺麗な人だから。

「……ありがとうございます」

「ええ、どういたしまして」

ここでまた、微笑み一つ。心臓が少しだけ驚いて大きく鳴った気
がした。

王都への道は、初めこそ獣道を歩くようなものだったのだけど、
徐々に道らしくなり、今歩くその場は確かに人の手入れがされてい
る場所だった。

だけど、それは私にとって見慣れているアスファルトではない、
土の道。あたりは緑も多く、時折咲く草花達は白、赤、黄色と色と
りどりで美しく、景色はすゞしく綺麗。ただ、見える草木も花々も見
知らぬものだけれど……。わかるのは、空と雲は同じというだけ。

「じくん、と音が聞こえるくらい、息をのむ。聞かなくちゃ、いけ
ないから。

「私は……」

「はい？」

斜め前を歩いていたカイトさんが、振り返った気がする。私はた
だ、空を見上げたまま呟くように言葉を続けた。

「どうして、ここにいるんですか……？」

「……詳しい話は、王都でいう事になりますが……昨日お話を
闇の民の事を覚えていましたか」

「人を襲う者達、ですよね」

「ええ。そいつらは……光の民にしか、倒す事はできません
え？ 水や、風とかは駄目なんですか？」

「ダメージを与えることは可能ですが、ですが、この世から消し去る
事はできません。それをできるのは光の民だけです」

「……光の民は、すごいですね」

「ですが、その代わり光の民は能力者の数が少ない」

民の数は光、そして他の四つの民も、そう変わらない、とカイト
さんは深刻そうな顔をして言つた。ただ、いくら加護を受けていて
も魔法を使う事ができるのは能力者だけで、その能力者の数が光の
民は極端に少ないのだと。

つまり私は、と考えて……一つの答えが出る。

「私は、能力者ですか？」

「……おそらくは」

「……わかりました」

それ以降、私はただ風景を眺めながら、カイトさんの後を歩く。
カイトさんが、何度も気遣わしげに私を振り返る。
もちろん、私はおそらくその能力者として力を使う為に探されて
いたのだろうと気づいている。けれど、それに対して怒りや憤りは
なくて。

あるとすれば……

ふと、影のように見えていたものが近づいてつれ大きな壁のよう
だと気づいた。

「王都は、あそこですか？」

しばらく眺めたあと、私が指差す先には、確かに町が見えていた。

白く高い建物と、人々が生活する沢山の家の屋根が見える。そしてそれをぐるりと囲う堅い石の壁に守られた街。

「ええ、そうです。もう少しですから、頑張ってくださいね」

「大丈夫です。あの」

「はい？」

そう、ただ一つ、思つ」と。

「私、お役に立りますか？」

私のその台詞に、カイトさんは驚いた様子で足を止めた。じつと深い青い瞳が私を見つめる。

とくん、と心臓が鳴る。

「私が言つのもなんですけど、嫌ではありませんか？ 私の話を聞いて、あなたは自分が何をさせられるか気づいたのでしょうか？ まだ、詳しく聞いたわけじゃないですし……それにカイトさんは私を助けてくれたんです。あそこでみんな狼さんにやられて死んだよりは、マシかもしれないし……話聞いてみないと、わからないから。それに」

私はそこで一度言葉を切つて、カイトさんの顔を覗き込んだ。急に目の前に近づいた私に驚いたのか、カイトさんは小さく「わ」と声をあげた。

「カイトさん小屋を出た時に、安心して下さって、守りますからって言つてたじゃないですか」

「……そうですね」

私はあくまで真剣だったのだが、カイトさんが少し照れたように赤くなる。

だつて、私今話を聞いて、安心してる。この人が守ってくれるって言つたのは、嘘ではないだろうから。

そして私達が再び歩き出した時、王都の門からは私達の姿を見

つけた青年が一人、ふつと笑って私達のほうへと歩き出していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5908y/>

たった、ひとこと

2011年11月23日19時45分発行